

ひと

等身大のイスラムを伝える映画祭をひとりで開く

ふじもと 藤本
たかゆき 高之 さん(45)

「旅をするように、イスラム教徒の姿や文化に触れて欲しい」。2015年から「イスラム映画祭」を開いてきた。手弁当のうえ昨年からは1人で。しかも、勤務先の宿泊施設が閉じて失職した。新たに得た映写技師の仕事と派遣のアルバイトで資金をため、17日からの3回目にこぎつけた。パレスチナやイラン、インド、シリアなどの13作品を紹介する。

イスラム世界との出会いは旅先だった。20代で脱サラしてアジアや欧州の28カ国へ。バングラデシュで聞いた礼拝時刻を知らせる「アザーン」の声の美しさに心を奪われ、パキスタンで出会ったイスラム武装勢力タリバーンの青年は暴力的に見えなかった。

けれども帰国後の01年に米同時多発テロが起き、それから11年、イスラム像が自分の中にあるものとずれていった。各国でテロが起きる度、その「ずれ」が広がる。

美しい景色や多様な文化。等身大のイスラムを知ってもらおう近道はないだろうか？ それはそれぞれの国の「映画」だと気づいた。東京、名古屋、神戸で上映し、監督や研究者らによるトークイベントも開く。発売されたばかりの共著は、映画祭の公式ガイドブックを兼ねる。「歩みを止めなければ、いつか目的地にたどり着く。映画祭は、バックパッカーをしてた時の感覚と似ている」

文・高橋友佳理 写真・池永牧子

